

若き西田幾多郎の生の倫理

——新資料「倫理学講義ノート」におけるギュイヨー受容——

中嶋 優太

はじめに

善は Selbstbehauptung [「自己主張」] であるとか、self-realization [「自己実現」] であるとか、expansion of life [「生の拡大」] であるとかいふ考を本として morality [「道徳性」] を説明して見たいと思ふ。(別：110)

『善の研究』「第三編 善」のもととなった四高での倫理講義の四年後、一九一〇年九月から西田幾多郎は京都帝國大学で倫理学を講じる。その講義ノート（以下、「倫理学講義ノート」と表記）のなかで、西田は善を「生の拡大」としてとらえる見方を提示した。この主張の背景には、ベルクソンと並ぶフランス語圏の生の哲学の思想家 J・M・ギュイヨー (Guyau, Jean-Marie, 1854-1888) の思想がある。本稿では、若き西田幾多郎のギュイヨー受容を、「生の倫理」の積極的評価という観点から論じる。⁽¹⁾

西田が道徳的善を生の拡大としてとらえるとき、問題になっているのは、しばしば生を抑圧するものとしてイメージされる道徳的義務のあつかいであった。『善の研究』「第三編 善」ですでに西田はいたずらに自己の要求を抑圧する義務を批判して、その正体をより大なる要求に求めていた。しかし、この段階では、生活力の増進を価値

の標準とする見方を批判するなど、西田は「生命」「生活力」の倫理的価値を評価することには及び腰だった。「倫理学講義ノート」を準備するなかで西田はギュイヨールの『義務も制裁もなき道徳』(*Esquisse d'une Morale Sans Obligation Ni Sanction*)を読み、豊饒性の原理に基づいた、自らを消費し、拡大する生命という考え方に触れ、生の自然な発展過程から我々の義務感情を説明することができるとを知る。本稿では、西田が「倫理学講義ノート」で、善を生をの拡大ととらえる背景に、こうしたギュイヨールの義務なき道徳の思想の受容があったことを論じる。また西田は「倫理学講義ノート」のなかで、ギュイヨールの『義務も制裁もなき道徳』からいくつかの興味深いエピソードを引用している。こうした引用から西田がギュイヨールの生命概念のどのような側面に共感を抱いたかを明らかにする。

一 『善の研究』における生命のあつかい

刊行された『善の研究』の倫理思想は、生命や生活力を肯定することについて複雑な態度を示している。確かに西田は我々の内的な欲求・要求を抑圧する義務という考え方を批判し、むしろ欲求・要求の実現こそ善だと強調している。しかし、『善の研究』のなかではこの論点は「人格」と結び付けられ、人格の実現が善だとされる一方で、生命力や生活力の拡大を善と見る態度は否定的にあつかわれている。例えば、「第三編 善」(一九〇六年倫理講義)のなかで、価値の標準を生活の欲望に見る考え方が紹介されたうえで、特にそれを快樂と結び付ける解釈が次のように批判されている。

心理学者は我々の生活力を増進する者は快樂であるといふ、併し生活力を増進するのが何故に快樂であるか、厭世家は反つて生活が苦痛の源であるとも考へて居るではないか。……凡て我々の欲望又は要求なる者は

説明しうべからざる、与へられたる事実である。我々は生きる為に食ふといふ、併しこの生きる為といふのは後より加へたる説明である。我々の食欲はかゝる理由より起つたのではない。小児が始めて乳をのむのも、かゝる理由の為ではない、唯飲む為に飲むのである。我々の欲望或は要求は啻にかくの如き説明しうべからざる直接経験の事実であるのみならず、反つて我々が之に由つて實在の真意を理解する秘論である。

(NKZ1: 97)

ここでは生活力の増進を価値の標準とする考え方が批判されているように見える。もつとも西田の言葉を丁寧に追うなら、問題になっているのは、食欲などの欲求や要求自体ではなく、こうした欲求・要求の事実の背後に、快樂の獲得や生命の維持といった目的を設定することだった。西田は、説明しうべからざる純粹経験の事実に道德的価値の標準を求めているが、欲求・要求自体はそうした事実なのである。このような曲折はあるにしても、結論だけを言えば、『善の研究』では生の拡大は善とはみなされない。次の引用に見られるように、善はむしろ人格の拡大や、その要求の実現だとされ、それは生活力とは区別されている。

斯の如き統一力を此処に各人の人格と名づくるならば、善は斯の如き人格即ち統一力の維持発展にあるのである。

爰に所謂人格の力とは單に動植物の生活力といふ如き自然的物力をさすのではない。又本能といふ如き無意識の能力をさすでもない。本能作用とは有機作用より起る一種の物力である。人格とは之に反し意識の統一力である。(NKZ1: 121)

ここでは人格の統一力と生活力が区別され、生活力は自然的な物力として、否定的に評価されている。もつとも、西田は「生」という語を肯定的に用いることもあり、その場合には単に肉体的な生命と区別されることが前提となる。たとえば「第四編 宗教」(その第一章のもととなる論文の初出は一九〇九年)では次のようにも語られる。

主意説の心理学者のいふ様に、意志は精神の根本的作用であつて、凡ての精神現象が意志の形をなして居るとすれば、我々の精神は欲求の体系であつて、此体系の中心となる最も有力なる欲求が我々の自己であるといふこととなる。而して此中心より凡てを統一して行くこと即ち自己を維持発展することが我々の精神的生命である。此統一の進行する間は我々は生きて居るのであるが、若し此統一が破れたときには、たとひ肉体に於て生きて居るにもせよ、精神に於ては死せるも同然となるのである。然るに我々は個人的欲求を中心として凡てを統一することができるであらうか。即ち、個人的生命は何処までも維持発展することのできるものであらうか。世界は個人の為に造られたる者ではなく、又個人的欲求が人生最大の欲求でもない。個人的生命は必ず外は世界と衝突し内は自ら矛盾に陥らねばならぬ。是に於て我々は更に大なる生命を求めねばならぬやうになる、即ち、意識中心の推移に由りて更に大なる統一を求めねばならぬやうになるのである。(NKZ1: 136)

ここでは「肉体」と区別された「精神的生命」が肯定的にあつかわれ、しかも、この精神的生命は個人的欲求から出発するものの、そこから大なる生命を求めるとされている。しかし、我々の生命から大なる生命の要求が出てくる経緯を示すことができるかどうか、これが大きな問題であろう。もし利己的な個体の生存本能を超えて、大なる生命ということが言えるのであれば、倫理や宗教の基礎を生命に置くことが可能かもしれない。けれども、生命が個人の生命の維持だけを目的とするものであるならば、そこからは義務の意識は生じず、利他的な道徳は成立し

ないように思われる。

このように、善と生との関連付けに対して及び腰だった『善の研究』（特に一九〇六年に執筆されたその第三編）とは対照的に、一九一〇年の「倫理学講義ノート」では、善は「expansion of life（生の拡大）」であるとされる。このことは、西田が生を原理として倫理を語り得るという確信をえたことを示している。本稿では、この確信の背景にギュイヨーとの出会いがあったという可能性を考えてみたい。

二 ギュイヨーと西田の接点

ギュイヨーはベルクソンと並ぶ、フランスの生の哲学を代表する哲学者である。彼は一八五四年、ラヴァルで生まれる。母オーギュステイーヌ・テュエリー（Augustine Tuilerie, 1833-1923）は、小学校教師として働き、フランスで国語の教科書として広く用いられた『二少年によるフランス周遊記』を執筆した。オーギュステイーヌの再婚相手、つまりギュイヨーの義父はアルフレッド・フイエ（Alfred Fouillée, 1838-1912）といい、彼自身、哲学者で観念力の理論などを主張した。ギュイヨーは、この二人の下で英才教育を受け、二十歳でリセ・コンドルセの教壇に立ったが、一八八八年、三十三歳の若さで亡くなった。

ギュイヨーは今日の日本ではほとんど研究対象となっていないが、明治末期から大正期にかけて盛んに紹介され、注目を集めた。日本でのギュイヨー受容については、鈴木由加里が丁寧に調査を行っている。鈴木によれば、日本で始めてギュイヨーの著作を紹介したのは中江兆民で、仏学塾のなかでギュイヨーの『現代イギリス道徳』（*La morale anglaise contemporaine*）を使用している。また、このテキストは兆民と門弟によって出されていた雑誌『政理叢談』（第十八号）に『スペンセル政治論略』（鳥州生訳 一八八二年）として訳出されている。その次にギュイヨーの著作を翻訳したのは大杉栄で、彼は雑誌『近代思想』（一九一三年）のなかに「生の道徳」というタイ

トルで『義務も制裁もなき道德』の結論部のみを訳出している。その後、大正期、昭和初期にかけてギュイヨーの主要著作のほとんどが訳出されている。それも、帝大出身の研究者だけでなく、在野の研究者によってもこぞつて翻訳がなされ、同じ著作に対して複数の訳本が出版されるという状況で、ギュイヨーの当時の流行ぶりが感じられる。⁽²⁾

西田との関連では、大杉と並んで最も早い時期にギュイヨーを本格的に日本に紹介した錦田義富に注目しなければならぬ。錦田は一九一一年の京都帝国大学の卒業生で、一九一〇年に赴任した西田の京都帝国大学での最初の教え子の一人である。錦田は、『丁酉倫理会講演集』(第一一六号、一九一二年四月 第一一七号、五月)に「ギュイヨーの道德無義務論」を載せており、大杉の「生の道德」のなかでも「たしか丁酉倫理会の講演集に、『道德無義務論』という題で、誰かのたいぶ詳しい紹介があつたはずだ」⁽³⁾と言及されている。この論文は刊行に先立つ二月十八日に京都帝国大学の哲学倫理学研究大会でおこなった講演の記録であり、また鈴木はこの講演自体が「卒業論文かもしれない」に手を加えたものである可能性も否定できない」としている。西田の日記を見ると、一九一一年五月二十六日「錦田の論文読了桑木君の方へ送る」、一九一二年二月十八日「午後哲学、倫理の大会あり 錦田〔義富〕はGuyau〔ギュイヨー〕を松本君は中観説の話あり」とあり、またこれらの前後に錦田が西田を何度も訪ねていることも確認できる。論文の査読、講演会への参加、さらに自宅での指導を通して、西田は錦田のギュイヨー研究に触れていたと考えられる。

錦田との関わりを含め、西田はギュイヨーとどのような関わりを持っていたのだろうか。新版西田幾多郎全集第二十四巻の人名索引からは五つの項目(①④⑤)が確認出来る。そこに、本稿であつかう「倫理学講義ノート」を含む西田の一連の倫理講義(①②)を加えて、時系列に並べると次のようになる。

- ① 一九〇六年九月開始 四高倫理講義 ↓『善の研究』〔第三編 善〕
- ② 一九一〇年九月開始 京都帝国大学倫理学講義 ↓「倫理学講義ノート」
- ③ 一九一〇年九月から毎年講ぜられた「哲学概論」の初期の講義ノートの文献メモ [Guyau, L'irreligion de l'avenir 『将来の無宗教』] (NKZ 15: 94)
- ④ 一九一〇年十一月二十四日日記「午前学校に行く Guyau [ギューヨ] をかりつゝ」 (NKZ17: 275)
- ⑤ 一九一二年二月十八日日記「午後哲学、倫理の大会あり 錦田〔義富〕はGuyau [ギューヨ] を松本君は中觀説の話あり」 (NKZ17: 308)
- ⑥ 一九一二年五月刊行『静修書目問答』への回答 (NKZ11: 80)
- ⑦ 一九一八年一月二十三日田辺元宛書簡「Guyau [ギューヨ] 御読みの由 あれは左程深いものではないが小生も面白く思ひ候 Guyauは文章も上手なればGuyau自身のものにて御説の方可然かと存し候 非常に天才的人と思うが惜しむらくは夭逝いたし候」 (NKZ19: 316)

まず注目すべきなのは一九一二年五月刊行の『静修書目問答』への回答のなかで、ギューヨの『義務も制裁もなき道徳』が挙げられていることである(④)。『静修書目問答』は、西田の四高学生時代からの友人で、当時京都大学学生監を務めていた山本良吉が国内外の学者に「学生ノ品性鍛錬ニ必要ナル書目」を挙げるように求めたアンケートである。西田は『聖書』、マルクス・アウレリウス『自省録』、パスカル『パンセ』、『論語』、『伝習録』など十四冊の書名を挙げている。西田が学生に読書を推奨するほどにギューヨ、特にその『義務も制裁もなき道徳』を評価していたことが分かる。ちなみにここにはベルクソンの著作はあげられていない。同時期の講義ノート「哲学概論」の文献メモ(①)にもギューヨの別の著作の名前が挙げられているし、やや時代が下る一九一八年の田

辺宛書簡⑤でも、「左程深いものではない」とやや限定的ながら「面白く思ひ候」と基本的には評価を変えていない。一方で、一九一〇年十一月の日記での「Gyau(ギューヨ)をかりてよむ」という記述からは、このときに西田がギューヨの著作を読んでいることと、それを所持していなかったこと、この二つの事実が推測できるのである。したがって、西田は一九一〇年十一月から本格的にギューヨの著作を研究し始めたと考えてよいだろう。

しかし、西田がギューヨ思想のどの点を評価し、なぜこの時期に読み始めたのか。それを知る手がかりは、従来の資料には存在しなかった。この謎を探る新しい手掛かりが、二〇二〇年に西田幾多郎全集別巻として刊行された新資料「倫理学講義ノート」である。これは西田が一九一〇年九月から京都帝国大学で行った倫理学の講義ノートで、その大部分は四冊のノートに書かれている。その三冊目のノートで、西田はギューヨを念頭にきつつ善を「生の拡大」とする見方を提示している。その際、西田はギューヨの『義務も制裁もなき道徳』を三頁にわたって紹介し、また随所でギューヨからの引用を行っている。西田は九月の開講後、講義を進めながら一冊一冊講義ノートを書き、十一月の時点でギューヨを本格的に研究し始め、その成果を直ちに反映させたのがこの第三分冊であろうと考えられる(九月の開講時に使われたと思われる第一分冊にも、人格について論じる際に、本文とは別にギューヨの引用・参照が書き込まれている。これは西田が講義の後から書き足したものかもしれない)。

三 西田の生の拡大の倫理

まず、西田が「倫理学講義ノート」で、道徳的善を生の拡大とした基本的な文脈を確認しておこう。一連の「倫理学講義ノート」群には、見出しと考えられる表記が十二箇所確認できる。本稿では便宜上、これらの見出しで区切られる部分を、順番に第一章、第二章と呼ぶ。生の拡大の倫理に関わるのは、その三冊目に当たるノートで、第四章「Good」の後半、第五章「善の形式」、第六章「Moral Insight(道徳的洞察)」からなる。第四章後半は次のよ

うに始まる。

先づ Werturteil〔価値判断〕の psychological development〔心理学的発展〕について研究してみよう。（別：86）

西田は道徳的意識を価値意識というより包括的な意識のなかでとらえる。彼によれば、我々の経験ないし意識は、動的なものであり、「好悪の情」を引き起こす「disposition〔気質〕」を持っている。これを西田は「a priori tendency〔アプリオリな傾向性〕」と呼び、その発展を論じる。生の倫理という我々の観点からは、この発展する気質を西田が生と関連づけていることが注目し値する。

此の disposition〔気質〕は nervous system〔神経系〕といふやうな material〔物質的〕のものであるか、又は das Unbewusstsein〔無意識〕「であるか」といふやうなことは後から考へたことであつて、とにかく dynamical〔動的〕のものである。一の streben〔努力〕である、evolving〔進化的〕のものである。これが Leben〔生〕である。我々の好悪の感情則ち value〔価値〕…〔は〕我々の Leben〔生〕を満足するものである。（別：86）

上の「das Unbewusstsein〔無意識〕といふやうな」という記述の後には「spiritual〔精神的〕なものであるかは別の問題として」という語句が書かれた後で推敲されているから、西田は「無意識」ということで意識の背後にある精神的原理を考えていたようである。一般に「生」を鍵語とする場合、それが生物学的・生理学的なものであるか、あるいは精神的なものであるかは大きな問題になりうるが、差し当たつて西田はその区別の手前で「生」をとりえようとしていることが分かる。

西田は生、つまりアブリオリな傾向性の発展について次のように論じている。一方では、衝動が満足されず、抵抗に出会うことで、意識のなかに主観的中心①と客観的中心②が分裂する。また、複数の傾向性がある場合にはそこに葛藤が生じるが、我々の意識は「one system」[一体系]即ち「one personality」[一人格]であるから、葛藤している複数の傾向性・要求を秩序づけ、統一する moral centre「道德的中心」③が成立するとされる。①は「natural」[egoistic] ならう「bodily」②は「objective」[intellectual] ならう「social」とも形容され、②と③を中心としてそれぞれ客観的世界、道德的世界が成立するとされる。では、「此等の centres」[中心]はいかに相互に関係して居るか」(別：88)。第四章後半で西田はこの問に答える形で①と②の同質性、さらに次のように①と③の同質性を主張している。

moral good「道德的善」といふのは前から述べた様な enlargement of life「生の拡張」の one form「一形式」にすぎない。duty「義務」といつて一種特別の ought「当為」があるわけではない。(別：100)

西田が道德的善を生の拡大として解釈するとき、重要なのは、まず我々の価値意識が発展するものとして動的にとらえられていることである。さらに、その意識の自然な発展によって道德的意識を説明することによって、道德を基礎づける超越的・形而上学的な原理を拒否している。その際、とりわけ問題になるのは義務の意識である。というのも、例えばカント的な立場では、義務は傾向性を抑圧するものとして、つまり生の抑圧と考えられるし、また、そうした生の抑圧が道德に必要であるならば、生の外部に道德の原理を求めなければならないように思われるからである。こうした義務の問題に対して、西田は義務の意識と考えられているものも生の拡大の一つの表れだとする。生の抑圧としての義務を否定し、義務意識を生の拡大に還元しようとするのである。

四 ギュイヨールの義務なき道徳

西田が「倫理学講義ノート」のなかで道徳的善を生の拡大としてとらえるとき、問題になるのは生の抑圧として考えられた義務の否定である。その際、彼は二人の思想家を参照している。一人は、カント的な義務論を心理学主義的に捉えなおし、傾向性を擁護して、事実（動機）の作用に身を任せることを求めたＴ・リップスの思想である。⁽⁴⁾そして、もう一人がギュイヨールであり、西田は三頁にわたってそれぞれの思想を紹介・引用し、義務を否定する自身の主張を裏付けている。ここではまず、ギュイヨール『義務も制裁もなき道徳』の思想を確認しておきたい。ギュイヨールは、事実に基づく科学的道徳から考察を始めようとする。

ただ事実のみを援用する道徳は最初から個人に対し行為の第一義的動力 (premier mobile d'action) として社会の善ないし幸福を提示することはできない。なぜなら社会の幸福は屢々個人の幸福に背馳するからだ。

(G: 83-84 訳: 94)

先入観を交えずに考察するなら、はじめから、我々の行為は社会的な善を目指しているものだと考えるわけにはいかない。まずは「個人主義的 (individualiste) であることを要する」と、ギュイヨールは主張する。では、「人間の行動の自然な目的 (le but naturel des actions humaines)」は何だろうか。行為は快楽 (plaisir) を目指す、といえるかもしれない。しかし、快楽を目的とするといえるのは多少なりとも意識的な行為の場合であり、無意識的な行為には当たらない。ギュイヨールは、意識的な行為はむしろ無意識的な本能や反射運動にその原理と起源を持つとして、我々が行為の際に意識的に求める目的よりも、むしろ無意識的に働いている行為の原因に注目すべきだと主

張する。そして、その原因こそ生命だという。

我々の信ずるところによれば、専ら科学的な道德にして完全なものであるためには、快樂の追求の如きは生命を維持し發展せしめんとする本能的努力の結果にすぎぬことを認めなければならない。事実、一切の意識的行動を決定する目的はまた一切の無意識的行動を生む原因であり、従つてそれは諸々の形態において最も充實旺盛なると同時に最も多様な生命そのものである。(G: 87 訳: 38)

ギュイヨーはこのように事實に基づいた科学的道德という観点から、我々の行為の目的であり原因である生命に注目し、生命の強度の増進、生命の活動領域の拡大が我々の行動の動力であると主張する。ではギュイヨーは生命をどのようにとらえたのだろうか。彼は生命を単に栄養を摂取するだけではなく、蓄えた余剰の力を消費するものとしてとらえている。「それ〔生命〕は多くを獲得すればするほど多く消費しなければならない。これがその〔生命の〕法則である。」(G: 101 訳: 112)。この豊穰性 (Fecondité) がギュイヨーの生命觀を特徴付けている。それは生物学的には、生殖本能と繁殖という形であらわれる一方で、精神的な側面からもとらえられている。彼は、知的豊穰性、情緒および感性の豊穰性、意志の豊穰性、という三つをあげている。思想家は自身の思想を著作という形で我々に与える(知的豊穰性)。また、我々は自分自身の喜びを喜び、悲しみを悲しむ以上の悲しみを持っているから、他者と感情を交歓して自己を増殖させる(情緒および感性の豊穰性)。さらに、我々は生産をして自己の活動の痕跡を社会に刻みつける(意志の豊穰性)。生命には「個体をして自分だけで充足せしめ得ないようにする拡大の原理」すなわち「豊穰性の原理」が働くのである。

最も豊かな生命は自己を浪費し、ある程度まで自己を犠牲にし、他のものために自己を分け与える傾向が最も大である。(G: 102 訳: 113)

ギユイヨーは生命を、豊饒性の原理に基づいて自己を拡大し、自らを消費するものととらえ、その自然の力によつて、義務の「なさねばならない」といういわくいいがたい原初的衝動を説明しようとする。この義務の意識として働く衝動を彼は「義務の等価物」と呼び、意志、知性および感性という三つの観点からとらえている。

意志の観点からとらえられた【義務の第一の等価物】についてみてみよう。意志の観点から見たとき、義務を生み出すのは活動力 (le pouvoir d'agir) そのものである。豊穰性の原理が語っているように、生命の余剰の力はそれが消費されることを要する。活動しうる力、能力があるところには、それが消費されるように活動しなければならぬという圧力が生じるのである。したがって、より大なることをなし得ると内心に感じることは、それ自体、それをなさねばならぬという義務の最初の意識なのである。義務は従来、必然または拘束の感情として説明されてきたが、ギユイヨーによれば、それは力の感情である。

活動し得るということは活動しなければならぬということだ。(pouvoir agir, c'est devoir agir) (G: 訳: 118)

またギユイヨーは知性の観点からみた【義務の第二の等価物】として、フイエの観念力 (idées - forces) の理論を引き合いに出しつつ、観念を思い浮かべることががそれ自体で活動の原動力になることを論じている。思想と行動は根本においては同一であり、観念はそれを実現しようとする努力と連続している。例えば、子供が内心に思ったことを、思わず口にしてしまうように、人間には自分の考えを表現しようとする傾向がある。いまだ現実と

なっていない、優れた社会を思い描くことは、それを実現する第一歩なのである。三つ目の感性の観点から見た【義務の第三の等価物】としてギューヨーが論じるのは、人類の進歩に従って、原初的な利己的な快樂よりも高級な社会的・社交的な快樂の比重が増すことである。われわれの快樂は次第に伝達的となり、人々は孤独を楽しむことはできなくなり、各人の快樂は、他者の快樂を必然的に含む合奏のようなものになるといわれている。このようにギューヨーは非個人的義務の三つの等価物を提示し、我々の義務を説明するのに、超越的法則や絶対的命令と言った神秘的な觀念を使わなくてもよいことを示した。彼によれば、豊穰性の原理にしたがつて強度を増し、拡大する生の發展によって、我々の内に働く道徳的な衝動を説明することが出来るのである。

これを要するに、真に実証的な道徳科学とでもある程度は責務 (obligation) を語ることが出来る。しかもそれは一方ではいかなる神秘的觀念をも介入せしめることなく、他方ではベインと共に外的社会的「拘束」とか内的「恐怖」などを援用することなくしてである。そうしたことをせずに、心的生の正常な諸方向を考究するだけで足りる。人は活動それ自体によってこれら正常な諸方向に働く一種の衝迫を常に自分のうちにみいだすであろう。(G: 115 116 訳: 127)

五 西田のギューヨー受容 生命への義務の還元

すでに確認したように、西田が道徳的善を生の拡大としてとらえるとき、問題になっているのは生の抑圧として考えられた義務を否定し、むしろ義務意識を生を要求に還元することであった。前節で確認したギューヨー倫理学を踏まえて西田が義務感情を生命の過剰や力の感情としてとらえなおしていることを確認しておこう。西田は三ページにわたって、ギューヨー倫理学を要約しつつ援用して論じているがその冒頭の部分で次のように書いている。

Guyau [ギューヨー]はduty [義務]を次の様に説明して居る。

duty [義務]の第一の equivalent [等価物]として le pouvoir d'agir [活動力]をあけて居る。内面的に capable de faire de plus grand [より大なることをなす]といふことは自分がそれをなすべき le devoir [義務]をもつていふことを意識する第一考 (première conscience [最初の意識])である。le devoir [義務]といふことは surabondance de vie [生命の過剰]である。之が le sentiment d'une nécessité ou d'une contrainte [必然または拘束の感情]として説明されたがその前に le sentiment d'une puissance [力の感情]でなければならぬ。Pouvoir agir, c'est devoir agir [活動しうることは活動しなければならないということである]。文明人は野蛮人よりは多数の devoir [義務]をもつてゐる。(別：103)

西田はギューヨーの議論を持ち出すことで、ギューヨーと同様に義務意識を生命の要求に還元する自身の立場を確立しようとしているのである。今引用した箇所は、義務の第一の等価物についてのギューヨーの説明を西田なりにまとめ直しているが、第二の等価物に関する言及もある。

実際我々が大きなduty [義務]を感じず(る)場合は深く為すべき或者者をかんじた時である。現在の subjective desire [主観的な欲求]以外[に]或事を想像しこれに由つて inspire [鼓舞]せられるのである。Guyau は un certain devoir impersonnel créé par la conception même de l'action [行動の概念そのものから生ずるある種の非個人的義務]といふ。(別：104)

[un certain devoir impersonnel créé par la conception même de l'action [行動の概念そのものから生ずるある種の

非個人的義務」はギューイヨールからの引用であり、フイエの観念力 (*idées-forces*) の理論にもとづいた【義務の第二の等価物】を指している。⁽⁵⁾

いずれにしても、西田が評価しているのは義務を生の活動の制限ではなく、その拡大としてとらえるギューイヨールの議論である。義務を説明するのに、生の外部から何か超越的な原理を導入する必要はなく、拡大する生の発展に目を向ければ自ずとそこに義務があらわれるのである。西田は、やはりギューイヨールの議論を念頭に次のように述べている。

moral obligation [道德的義務] は les directions normales de la vie psychique [心的生の正常な方向] を見れば沢山である。conscience [意識] と *le fond* は reflected consciousness [反省された意識] に由つて reflected consciousness [反省された意識] より来らぬ。du fond subconscient de noir-même [私自身の潜在意識の底] より来り自分を或determined direction [規定的な方向] へ pousser [推進] するものである。

restriction de l'activité [活動の制限] でなく expansion [拡大] である。(別: 104)

西田は『善の研究』ですでに「一層大なる要求を擧げすべき者があつてこそ、小なる要求を抑制する必要があるのである、徒らに要求を抑制するのは反つて善の本性に悖つたものである。」[NKZ1: 115-116] と述べ、活動を制限する義務を批判し、むしろ義務の正体を一層大なる要求に見ていた。活動の制限ではなく拡大として義務を説明するギューイヨールの議論は、まさに西田がいわんとしていた事柄であり、西田はその点に強く共感した。そのうえ、ギューイヨールが一貫して生命の立場から義務意識を説明していたことが、生命によつて義務意識を説明することができるという確信を西田に抱かせ、そのことが『善の研究』(の第三編)のなかでは遠慮がちに語られていた「生命」

が一〇年の倫理学講義のなかで積極的に取り上げられ、善を生の拡大ととらえることにつながったと考えられる。

六 西田が関心を向けるいくつかのエピソード

西田がギユイヨーを評価した基本的な理由は生を抑圧するものとしての義務を否定し、我々の道徳性や義務の感情の正体を生の拡大としてとらえた点にあった。ここでは、それに加えて、西田が「倫理学講義ノート」でギユイヨーから引用しているいくつかのエピソードを通して、西田が注目しているギユイヨーの別の側面に目を向けたい。一つ目のエピソードは次の、やや断片的なニュートンに関する記述である。

Leben [生] の value [価値] は長短にあらず。possibilité d'un sacrifice définitif [決定的な犠牲の可能性]⁽⁶⁾
(Guyau [ギユイヨー] 155) Newton, Isaac [イザック・ニュートン]」 [別: 99]

西田はここでギユイヨーの「冒険および闘争の快より引き出される義務の第四の等価物」を念頭においている。⁽⁶⁾ギユイヨーは道徳的義務を生の拡大として説明した。しかし、我々が感じる道徳的義務の衝動は、我々の生（の余剰）を一部犠牲にし、他者に与えるだけでなく、決定的な犠牲を命ずることがあるように思われる。つまり非常に危険な行為や、確実な死が予想される行為をあえて行うということがある。この決定的犠牲への衝動を説明できるかどうかギユイヨーにとつての課題となる。彼は、冒険や闘争そのものが持つ快に言及して、その解決を図ろうとしている。そのなかで、一見して生命を軽視するような行為に関連し、一瞬の生が長い人生全体に勝る場合があるといい、その一瞬を得た人物としてイエスとともにニュートンを挙げている。

諸君が一瞬の間でも、引力の法則を発見したニュートンなり、山上で愛を説いたキリストなりになることを許されたと思像してみよ。諸君にとつてその残りの生活は味気なく空虚なものと思われて来るであろう。諸君はすべてを賭してもこの一瞬を求めるであろう (G: 155 訳: 169)

引力の法則を発見した瞬間はニュートンにとつて、その後の人生のすべてに比肩する充実した瞬間だったかもしれない。生命の価値はその長さでは測れないのであり、短くとも充実した生を目指すべきだと西田は考えたのである。講義ノートにこのメモが書かれたのは、発見の瞬間を指して学問の地道な作業に従事する、自身と学生に対するエールの意味もあつたのかもしれない。

西田がギュイヨーから引いているもう一つのタイプのエピソードは義務感情の無意識的な側面に関するものである。西田が言及しているのはギュイヨーが紹介している次の二つのエピソードである。

① 廉直なドオメニルの発言

根気強い廉直を以て高名なドオメニルという人が或る日シャルル十世の一大臣にいった、「私は自分の良心に従つて進むものではありません。良心が私を押し進めるのです」と。(G: 117-118 訳: 129)

ギュイヨーは「良心に従つて進む」という意識的に義務感情に甘んじるあり方と、考える暇もなしに義務感情に押しやられるあり方の区別を問題にしている。

②ピレネ山中の石灰爐の事故

ピレネ山中の石灰爐で作業員が故障の原因を調べるために爐の中に降りて窒息をした。この作業員を助けるために作業員が一人、また一人と降りては次々と倒れた。最後の六番目の作業員は、やはり爐に降りようとしたところを目撃していた女性に止められて、一命をとりとめた。後になぜ爐に降りて不合理な犠牲を払おうとしたのかを問われて作業員は次のように答えた。

連れのものが死ぬんですから、あそこへいかなくちやならなかつたんです。(G: 118 訳: 130)

この二つのエピソードはいずれもギュイヨーが義務感情の無意識的な側面を示すために持ち出したものである。これらのエピソードのうちとくに石灰爐の場合は、およそ合理的とは思われない義務感情の発動であるが、西田はそれぞれのエピソードを引用し、肯定的にとらえているように見える。⁽⁷⁾人間の行為を、その意識的な側面だけでなく、無意識的な本能や衝動のレベルでとらえる点はギュイヨーの倫理学の大きな特徴であるが、西田もまた、この点を好意的にとらえていたといえる。

おわりに

本稿では『善の研究』では限定的にとらえられていた生の倫理的価値を西田が積極的にとらえなおし、一九一〇年の「倫理学講義ノート」で善を生を拡大だとした背景にギュイヨーの『義務も制裁もなき道德』の受容があったことを明らかにした。ギュイヨーが自らを消費し、拡大する生命によって、義務感情を生を拡大過程の中で理解したことに西田は共感を覚え、その議論を利用することによって、『善の研究』の時点ですでに抱いていた、抑圧と

しての義務を否定する倫理思想を補強し、義務感情を生の拡大としてとらえなおすことができた。また、西田が「倫理学講義ノート」でギュイヨーから引用しているいくつかのエピソードからは、西田が時間的な長さでは測れない充実した生の価値を評価していたこと、また、義務感情の無意識的で衝動的な側面に注目していたことが読み取れる。

こうしたギュイヨー評価・受容の様相からは、当時の西田が生という語に託していた三つの側面を読み取ることができる。一つは義務意識を生の拡大に還元する議論に見られるように、絶対的命令などの倫理学上の超越的な仮定を拒否する文脈で生という語が使われていることである。ギュイヨーが事実に基づく科学的道徳の構築を目指したように、西田もまた超越的な前提を排し、あくまでも経験に即して論じようと意図しており、このことが生命の立場への共感の理由の一つであったといえる。他方で、充実した瞬間的生の価値を評価したことに見られるように、西田は単なる生物的な生命の維持を超えた価値を生命に認めてもいる。瞬間的生のエピソードは、ギュイヨーの著作全体のなかではかならずしも重要ではない傍系の議論にすぎないが、そこに注目したところに西田の関心がうかがえる。もともと、ギュイヨー自身の中心的な主張である生命の豊饒性の原理も、単に生物学的な側面ではなく、精神的な側面から論じられているのであり、生命の精神的な側面の強調もまた両者に共通する特徴と言えるかもしれない。さらに、ドオメニルの「良心が私を押し進めるのです」という印象的なフレーズの引用に示される義務意識の衝動的、無意識的な部分の強調である。行為の意識された目的ではなく、その背後にある無意識的な衝動に目を向けたことはギュイヨー倫理学とその生概念の特徴であるが、このことも、西田がギュイヨーの生の倫理を受容した理由の一つと言えるだろう。

参考文献

- Guyau, M., *Esquisse d'Une Morale Sans Obligation Ni Sanction*, Paris, Félix Alcan, 1903. 訳文は長谷川進訳（『義務も制裁もなき道徳』岩波書店、一九五四年）
- 大杉 栄「生の道徳 ジャン・マリ・ギュイヨー」『大杉栄・伊藤野枝選集 第三巻 社会的個人主義』黒色戦線社、一九八八年、二六―四〇頁。
- 杉村靖彦「純粹記憶の「自覚」 西田幾多郎の絶対無の哲学からの（過剰）解釈」『ベルクソン『物質と記憶』を再起動する』書肆心水、二〇一八年、二八九―三〇三頁。
- 鈴木由加里「日本におけるジャン・マリ・ギュイヨーの受容について」『人文』学習院大学人文科学研究所、二〇〇六年、三九―五六頁。
- 中嶋優太「西田の新資料『倫理学講義ノート』における至誠とリップス倫理学」『比較思想研究 第四八号』比較思想学会、二〇二二年、一〇七―一四頁。
- 中嶋優太「西田幾多郎の必然的自由と無我 新資料を手がかりに」『倫理学年報』日本倫理学会、二〇二三年、一七五―一八八頁。
- 西田幾多郎『西田幾多郎全集』、岩波書店、二〇〇二―二〇〇九年。
- 西田幾多郎、『西田幾多郎全集別巻』、岩波書店、二〇二〇年。
- 檜垣立哉『西田幾多郎の生命哲学 ベルクソン、ドゥルーズと響き合う思考』講談社、二〇〇五年。
- 藤田正勝「第二章 生と表現、そして美の問題」『西田幾多郎の思索世界』岩波書店、二〇一二年。
- G・E・ムア『倫理学原理』泉谷周三郎・寺中平治・星野勉訳、三和書籍、二〇一〇年。

略号（凡例）

西田 (2002-2009) からの引用は略号「NKZ」を用い、巻数および頁数を付した。西田 (2020) からの引用は略号「別」を用い、頁数を付した。【】は西田が削除した文字、「（）」は全集収録にさいして編集担当者が付した補足、《》は本稿執筆のために付した補足である。「」内の訳語は文脈に即して適宜修正した。

Guyau(1903)からの引用には略号「G」を用い、頁数を付した。また、訳の頁数も添えた。

注

(1) 西田哲学を生命の哲学としてとらえる試みとしては檜垣二〇〇五年、藤田二〇一一年などがある。檜垣は、実際の影響関係よりも思想内容の響きあいという観点から西田の初期から後期までの思想をベルクソン、ドゥルーズの哲学と関連付け、西田を生る哲学の展開者として描いている。藤田は、西田が『善の研究』刊行後にデイルタイに関心を寄せたことに注目し、デイルタイにおける個人と環境との交互作用としての「生」の理解に西田が共感を抱いたと論じている。

西田哲学とベルクソン哲学との関係についての最近の研究としては杉村二〇一八年がある。杉村は西田中期の思想である「絶対無の場所」を手掛かりに、ベルクソン『物質と記憶』を読み直している。『善の研究』執筆時の西田はまだベルクソンのテキストを読む機会に恵まれていなかったと思われるが、一〇年の倫理学講義ノートでは、ベルクソン『意識に直接与えられたものについての試論』の自由論が受容されている。この点については中嶋二〇二三年参照。

(2) 西欧においても一種の流行思想となっており、例えばG・E・ムア『倫理学原理 (*Principia Ethica*)』(一九〇三年)のなかで、「スเปนサーほどには知られていないが最近フランスでかなり受けている、ギユイヨールの学説」(ムア2010:159)と書かれている。この中でギユイヨールは「進化論的倫理学の擁護に用いられる自然主義の誤謬のもつとも明白な例」としてあつかわれている。

(3) 大杉1983:26

(4) 西田が「倫理学講義ノート」のなかで、T・リップスの倫理学を援用して人の傾向性を擁護している点については中嶋2022で論じた。なお、その際、西田はT・リップスの *leu* (誠実) の規則を日本思想の「至誠」と結び付けて理解している。

(5) また、(別:104) には以下のようなメモも含まれている。

duty [義務] を analyse [分析] すると

1. conscience de puissance [力の意識]

2. sentiment social (benevolence) [社会的感情(慈悲)]

3. plaisir de risque, l'homme a besoin de se sentir grand, d'avoir par instants conscience de la sublimité de sa volonté. (146) [冒険の快。人間は、自らを偉大だと感じる必要があり、時には、自己の意志の崇高さの自覚をもつ必要がある。(146頁)]

このメモの「1」は、ギユイヨールの義務の第一の等価物を、「2」は義務の第三の等価物を念頭に置いたものであろう。「3」の「冒険の快」もギユイヨールからの引用であり、ギユイヨールはそれを第四・第五の等価物として論じている。

(6) ギュイヨー自身はさらに、義務の第五の等価物として形而上学的冒険についても語り、科学的な事実の道徳をこえた、個人的な仮定の道徳が存在することも認めている。

(7) ドオメニルの発言は「第二章 人格と個人性」のなかで、義務を小なる理想に対する大なる理想の要求、人格の一部に対する全体の要求と論じた後で、「obligation et devoir〔義務と責務〕は expansion de la vie〔生の拡大〕より来る。」というコメントともに引用されている(別：41-42)。石化爐の事例は「第六章 Moral Insight〔道徳的洞察〕」のなかで、道徳的洞察を、主客未分の状態、純粹経験の発展の状態、自他一致の感情等々と特徴づける議論に添えて、T・リップスの感情移入と並べて引用されている(別：120)。

本研究はJSPS科研費(23K18631)の助成を受けたものである。

(筆者 なかじま ゆうた 石川県立看護大学)

The Ethics of Life in Nishida Kitaro's Early Period: J.M.Guyau in Nishida Kitaro's Newly Discovered 'Lecture Notes on Ethics [Rinrigakukenyunoto]'

by

Yuta NAKAJIMA

Ishikawa Prefectural Nursing University

From September 1910, four years after the lecture on ethics at Shiko (四高) which formed the basis of the third volume of his *An Inquiry into the Good*, Nishida Kitaro gave a set of lectures at Kyoto Imperial University. In lecture notes prepared for this occasion, he presented a view of the good as an “expansion of life”. Behind this assertion was the thought of Jean-Marie Guyau (1854-1888), who, along with Henri Bergson, is an important figure in discourses concerning the philosophy of life in the French-speaking world. In this paper, I interpret Nishida's ethical thought as an “ethics of life” and discuss its characteristics, taking the young Nishida's acceptance of Guyau as a clue.

When Nishida viewed the moral good as an extension of life, the treatment of moral obligation became problematic, since obligation is often conceived of as something that suppresses life. Nishida had already criticized the obligation to suppress one's own desires unnecessarily, and sought to find the essence of moral obligation in a greater desire in Part III of *An Inquiry into the Good*. At this stage, however, Nishida was reluctant to evaluate the ethical value of “life” or “vitality,” criticizing the idea that the enhancement of vitality is the standard of value. In preparing his *Lecture Notes on Ethics* Nishida read Guyau's *Esquisse d'Une Morale Sans Obligation Ni Sanction*. He was then exposed to the idea that life consumes and expands itself based on the principle of fertility, and that the natural developmental process of life can explain our sense of duty. In this paper, I argue that Nishida's acceptance of Guyau's idea of “morality without obligation” is the background for his view of the “good” as the expansion of life in his *Lecture Notes on Ethics*.

In his *Lecture Notes on Ethics*, Nishida also quotes several interesting episodes from Guyau's *Esquisse d'Une Morale Sans Obligation Ni Sanction*. These

quotations reveal the particular aspects of Guyau's view of life with which Nishida sympathized. By including quotes from these episodes as clues to Nishida's acceptance of Guyau, this paper will clarify Nishida's ethical philosophy of life.